

英国スタディ・ツアー

日 程：2009年9月7日(月)～15日(火) 8泊9日

参加者：合計12名(大学生など10名、同行指導1名、通訳コーディネーター1名)

面談者：合計32名(英国グラウンドワーク関係者、ボランティア、社会的企業関係者など)

目 的：日本の若者たちが英国で実施されている実効性の高い地球温暖化対策であるグリーン・ジョブ活動に参加することを通して、身近な環境改善の推進手法や英国内での先進的な取り組みの動向などについての国際的な視野と問題意識の醸成を図ること。

主催：グラウンドワーク三島

助成：ジャパン・ソサエティ



@ London Euston Station

集合場所であるロンドン・ユーストン駅にて、今回のスタディ・ツアーについてのオリエンテーション。学生参加者については、海外旅行が初めてという人も多く、また全員が、英国に来るのは初めてとのこと。同行指導の渡辺豊博グラウンドワーク三島事務局長(都留文科大学教授)の話に真剣に聞き入っていた。



@ Groundwork Black Country

最初の目的地は、「グラウンドワーク ブラック・カントリー」。1989年に創立され、今年20周年を迎える慈善団体だ。年間予算規模は約4億円で、主な事業は、「コミュニティ(地域の活性化)」「教育」「環境ビジネス支援」「景観改善」そして「若者支援」の5分野。大学卒業生を対象にした実習制度(GAP: Graduate Apprentice Programme)など先駆的な試みを行っている。グラウンドワーク三島とは、2009年2月に若者交流に係るパートナーシップ協定を締結した。



@ Groundwork Black Country

Welcome to UK! 事務所に到着すると、英国の伝統料理フィッシュ&チップスで歓迎していただいた。



@ Black Country Living Museum

まず「ブラック・カントリー生活博物館」を訪れた。約 104ha の広い敷地に、産業革命の時代の街並みが再現されており、当時の衣装を身に着けた係員が同行して詳しく案内してくれる。当時、ブラック・カントリーでは、良質の石炭と鉄鉱石が産出し、鉄鋼業が興隆していた。またその煙突から、常にモクモクと黒煙が立ち上っていたことが、「ブラック・カントリー」の地名の由来になっているとの説明だった。



@ Groundwork Black Country

夕方には交流会。ホスト・ファミリーなども駆けつけてくれた。学生たちは、初めての本格的な英会話に、ちょっとドキドキ



@ Environmental Center (Groundwork Black Country)

爽やかな晴天。グラウンドワーク ブラック・カントリーの概要などについてのプレゼンテーションと質疑応答セッションは、野外で行った。



@ Environmental Center (Groundwork Black Country)

午後からは、環境保全活動の一環として、英国の若者たちと合同で環境センターの案内板設置作業を行った。



@ Environmental Center (Groundwork Black Country)

この環境センターでは、随時、自然教室などが開催されており、地元の小学生などたくさん子どもたちが訪れているとの説明だった。



@ St. Thomas's Community Network

今回の社会的企業視察先は、Dudley の住宅街の中にあるセント・トーマス・コミュニティ・ネットワーク。廃校になった中学校を市から無償で借り受け、移民を対象にした英語教室、学校を中退した若者へのキャリア・ガイダンス、家具のリサイクルショップ、そして有機農園などを運営している。

ちなみに社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）とは、社会的課題の解決のために市場メカニズムを活用する事業組織のこと。セント・トーマスのコースも、一部を除いて有料だが、事業収益は、株主に配当されるのではなく、活動に還元されるところが、株式会社とは大きく異なるところだ。



@ St. Thomas's Community Network

施設を案内してくれたジニーさんは、インド系の移民だそうです。

ここで働き始めたきっかけは、英語の識字教室を受講したことだと言う。「幼い頃から両親に連れられて、あちらこちらの国々を転々としていたので、学校教育を受けることができなかったの。読み書きができるようになったのはこのセント・トーマスのお陰よ。その時、もう40歳になってたけど」と笑った。そして今は、かつての自分のように、社会の中で困っている人達が、自分なりの活路を見つける力になりたいと、時間を見つけては、足しげくコミュニティ通いをしているのだそうだ。



@ St. Thomas's Community Network

有機農園も案内してもらった後、その新鮮な野菜をたっぷり使った昼食をいただいた。なお、食堂の壁には、ブラウン首相の来訪を受けた時の写真が飾られていた。



@ Groundwork Black Country

グラウンドワークの事務所に戻り、引き続き、英国グラウンドワークについてのブリーフィング。現在、英国内に 50 あるトラストの管理部門を 12 のリージョン事務所に統合する動きが進められている。



@ Groundwork Black Country

ジョン・コトグレーブ グラウンドワーク中西部リージョン事務所長と渡辺豊博グラウンドワーク三島事務局長



@ Groundwork Black Country

グラウンドワーク ブラック・カントリーのスタッフ、ボランティアの皆さんなどと



@ Dr. Robin Henshaw's house

英国グラウンドワークの立役者の一人、ロビン・ヘンショウ博士（英国勲章受賞）のご自宅で、ポテト・パイなど伝統料理をご馳走になった。奥様のクリスティーンさんと。



@ Lake Ullswater (Lake District)

ロビン・ヘンショウさんにご案内いただき、湖水地方を散策した。

「19世紀末頃、英国では多くの開発業者が、カントリー・ハウスや牧草地などを買いあさろうとしていた。それに対して、歴史的な建物や景観をそのままの姿で守ろうと立ち上がったのが、ナショナル・トラストという市民運動だ。この湖水地方でも、ピーターラビットの作者ベアトリス・ポターが、本の売り上げを、競売にかけられた土地や建物の購入にあて、次々とナショナル・トラストに寄付した。今、私たちがのどかな田園風景を楽しむことができるのは、そうした先人のお陰。」



@ Lake District

私たちの滞在期間中、連日、いいお天気に恵まれた。



@ Lake District

Windermere 湖近くの遊歩道では、木の根元に、広島への原爆投下日を記したプレートが置かれていた。核兵器のない平和な世界を願って。



@ William Adams Roundabout (Medway)

グラウンドワーク ケント&メドウェイの招きを受け、ロンドンの南東約 50km にあるメドウェイにも足を延ばした。

メドウェイは、17 世紀初、英国人として最初に日本を訪れたウィリアム・アダムス(三浦按針)の生誕地。メドウェイ市は、ウィリアム・アダムスの名前を冠したロータリーを、日本をテーマにしたものに変更したいとしており、グラウンドワーク ケント&メドウェイが請け負った。

渡辺豊博グラウンドワーク三島事務局長は、本事業の設計デザインを担当することになった。



@ Heathrow Airport

ヒースロー空港で、8日間の研修をふりかえった。「毎日たくさんの学びがあった」「今回、英国で学んだことについて、日本と比較して考えていきたい」など、熱いコメントが続いた。